

P-1 Dental Electronic Anesthesiaの小児歯科診療における臨床的評価について 第1報

後藤譲治、○一瀬暢宏、富永礼子、張野細矢由美子、*大井久美子

(長大・歯・小児歯)

* (長大・歯病・歯科麻酔)

電気歯科麻酔(以下DEA)は経皮性に電気刺激を伝えることによって、疼痛のコントロールを行う麻酔法の一つである。今回、DEAの小児歯科領域における応用に関する臨床的評価を行うに先立って、本学歯学部医局員等に應用して予備実験を行ったので報告する。

方法:被験者は成人男女8名(24~33歳)である。本実験に用いたのは3M社製DEAシステム8670型である。應用にあたっては本体システムのコードに取り付けた電極カードをオトガイ孔相当部の皮膚に貼付し、電極付近の不随意筋の運動が認められるまで出力を上昇させた。被験者に対して、1)無麻酔下に下顎第2小臼歯にラバーダムクランプを装着。2)片側に表面麻酔(ネオザロカインパスタ[®])應用下に浸潤麻酔(2%キシロカイン[®])を施し、クランプを装着。3)反対側の同部位にDEA下で浸麻針を刺入後(薬液は注入しない)、クランプを装着。以上、各ステップ終了ごとに疼痛について4段階(3:強度の疼痛 2:中程度の疼痛 1:軽度の疼痛 0:無痛)の評価を行った。また、表面麻酔とDEA、および浸潤麻酔とDEAのいずれの方が好ましいか選択させた。

結果:1)無麻酔下でのクランプ装着時の評価平均値は 1.75 ± 0.89 であった。2)表面麻酔下での浸潤麻酔刺入時の評価平均値は 1.63 ± 0.74 、DEA下での浸麻針刺入時の評価平均値は 1.00 ± 0.76 で両者間に有為差は認められなかった。3)浸潤麻酔下でのクランプ装着時の評価平均値は 1.00 ± 0.93 、DEA下でのクランプ装着時の平均値は 1.13 ± 0.64 で両者間に有為差は認められなかった。4)DEAと表面麻酔との選択をみると、8名中7名(87.5%)がDEAの方が好ましいと回答したのに対し、DEAと浸潤麻酔では8名中2名(25.0%)がDEAを、3名(37.5%)が浸潤麻酔を、3名(37.5%)がどちらとも言えないと回答した。

P-2 鹿大小児歯科外来における心身障害児(者)の衛生統計学的研究-1989年から1993年まで-

○石倉行男、森主宜延、井上浩一郎、豊島正三郎

鹿児島大学歯学部小児歯科学講座

地域の三次歯科医療機関として存在する地方の大学附属歯科医院において、障害者の歯科医療における役割は大きい。前回、鹿児島大学歯学部附属病院小児歯科における外来患者を対象に、障害者の歯科医療にどのように関わっているのか創設時(1980年)から1988年までの衛生統計学的検討を行い、来院患者の動向が、患者の自主的受診でなく大学の呼びかけにより左右され、十分にその役割が果たせないでいることが明らかにされている。今回、1989年から1993年までその後の衛生統計学的調査を行い、新たな点が明らかとされたので報告する。

研究対象ならびに方法:対象は、当科に受診した障害児(者)男子289名、女子158名、合計447名である。方法は、患者カルテより必要事項すなわち、障害名、年齢、性別、紹介の状況、居住地域、齲蝕罹患状況、治療内容、歯科治療の受診経験の有無などを記録し資料とした。

結果ならびに考察:対象者は、1990年より減少傾向を示し、ここ数年この傾向が加速されてきた。また年齢分布については、4歳から6歳が最多頻度を示し、9歳以下が全体の78.8%を占めていた。この点については前回の調査と同様であった。主な障害は、発達遅滞が最多頻度を示し、ついで心疾患、脳性麻痺、自閉症の順であった。この結果は、前回の自閉症が最多頻度を示したのとは異なった結果を示した。この点は、地域の歯科医院における障害者の受ける状況が向上したとともに齲蝕罹患の減少も考えられた。地域別では、前回と比較し市外の増加が認められること、来院に際して、大学との関係でなく自主的ならびに、大学と関係のない医療機関からの紹介が増加していた。これらのことから10年を経て地域の中核医療機関として日常的な役割が行えるような状態になってきたこと、調査地域において、障害者の歯科医療の基盤が拡がりつつあることが伺えた。